



Title	大規模群集墳に対する須恵器の供給とその特質：古墳時代後期の近江・美濃地域を対象に
Author(s)	我妻, 佑哉
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2023, 57, p. 27-54
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/94905">https://hdl.handle.net/11094/94905</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 大規模群集墳に対する須恵器の供給とその特質

——古墳時代後期の近江・美濃地域を対象に——

我妻 佑哉

キーワード：古墳時代／群集墳／須恵器／横穴式石室／千里窯跡群

## はじめに

古墳時代後期（陶邑須恵器編年MT15型式期～）における須恵器の生産と供給は、当該期の葬送儀礼とその背景に存在する地域関係・階層関係をよく反映するとされ、後述するように、当該期に活発に形成される群集墳の横穴式石室に供献された須恵器の量の大小、器種・器形の選択性、製作時の一括性の有無がそれらの関係性を表出していると考えられてきた。

一方で、使用された須恵器の産地・系統と上述の差異との関連については、大阪平野南部の陶邑窯跡群を発信源とする汎列島の共通性の高さゆえに議論の俎上に載せられる機会が少ない。しかしながら、古墳時代後期以降については、地方窯での生産が活発化するため、細部の形状・施文・製作技法に地域差が生じる。したがって、生産地出土資料の悉皆的分析の成果を活用すれば、肉眼観察でも消費地資料の産地・系統推定がある程度は可能である。

そこで本論では、近隣に生産地を抱えていないものの、須恵器が大量に出土する近江・美濃地域の大規模群集墳（近江志賀古墳群・美濃船来山古墳群）を主な対象に、当該期において畿内周縁部地域の群集墳被葬者層がどのような生産地から須恵器を入手したのか、そこに地域差・階層差はどの程度反映されていたのかを検討し、政治権力の介入の有無も視野に入れて、古墳時代後期における葬送儀礼関連物資の生産・供給の実態とその特質に迫りたい。

## 1. 研究略史と本稿の射程

### (1) 古墳時代後期の須恵器生産・供給にかんする研究略史

畿内およびその周縁地域においては、古墳時代後期に入ると埋葬施設として横穴式石室が有力古墳から群集墳に至るまで広く採用されるようになる。異論はあるが、これを機に須恵器を埋葬施設内に持ち込む儀礼が急速に普及したと考えられている（藤原1985など）。その内容については、文献史料にみる「ヨモツヘグイ」「コトドワタシ」との関連（小林1949、白石1975など）や、韓半島の墳墓における土器供献儀礼からの影響（土生田1994など）、列島在来の墳丘上における土器供献からの連続性（寺前2012、北山2020など）など、様々な見解が存在するものの、概ね共飲・共食や死者への供物を想定する点は共通する。

ただし、横穴式石室から出土する須恵器の組成や出土状況、他の副葬品との相伴関係から、儀礼の場で使用された器種・器形については、一定の選択性を読み取る見解が存在する。例えば、乙訓地域と呼ばれる京都府桂川右岸域の後期古墳においては、高坏などの脚付器種が横穴式石室を備えた前方後円墳のみで使用され、その他の小円墳・方墳では出土しない傾向が判明しており、階層差と器種の選択性との連動性が伺われている（寺前2005）。一方で、必ずしも高坏類が有力古墳に限定されない群集墳の存在（岩越2021）や、時期に応じて蓋坏が量的に卓越する場合と有蓋高坏が卓越する場合とが入れ替わっていく（森本2012）など、地域や時期による差異も認められる。

ここで注目したいのは、古墳時代後期において、横穴式石室への供献の普及と併行して、須恵器の生産にも変容が生じることである。当該期には蓋坏口径の大型化や脚付器種の長大化といった器形の変化と、量産に伴う粗製化が開始される（田辺1966、中村1976など）。さらに、5世紀代に列島の中心の生産地であった大阪平野南部の陶邑窯跡群（堺市・大阪狭山市・和泉市など）に加えて、大阪平野北部の千里窯跡群（豊中市桜井谷窯跡群・吹田市吹田窯跡群）が大規模生産を開始する（田村2010など）など、須恵器生産が列島各地に波及する点にも、上述の需要増と密接な関連が想定できる。

上述の内容と関連して、横穴式石室墳をはじめとする後期古墳においては、生産地での製作・焼成の同時性を反映したものとみなしうる、一括性の高い須恵器の一群が出土する場合がある（石井2007、木許2009など）。このような事例は、埋葬に関与した人々が葬送儀礼に供する須恵器を関係性の近い生産地からあまりタイムラグを置かず直接的に入手・使用したことを示すものと推測でき、通常の集落での入手・使用・廃棄のプロセスとは異なる、古墳時代後期における古墳への須恵器の供給の特徴の一つとも考えられる。

## (2) 問題の所在と分析の視座

**問題の所在** 研究史を概観すると、須恵器が古墳の埋葬施設内へと持ち込まれるようになる儀礼の変化を機に、他の副葬品と同様に須恵器自体もその使用量・器種の選択性が地域や階層と深く関連するようになり、生産・供給の側面にも影響を与えたと評価しうる。

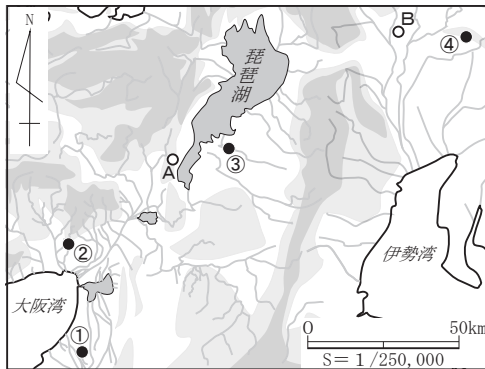
しかしながら、古墳への須恵器供給の実態を考えるうえで重要な要素と考えられる、製品の産地・系統差については議論があまり及んでいないのが現状である。これまでに5世紀代でも特に後半については陶邑窯製品の全国規模での供給が判明している（三辻・中村・犬木2016）ものの、6世紀代には上述の葬送儀礼に際しての需要増を受けてか、各地で須恵器生産地が成立・発展する（植野1998、岩越2018）。にもかかわらず、既往の研究においては、畿内中枢における陶邑窯・千里窯の製品差や、他の地方窯における独自色が、横穴式石室墳をはじめとする消費地の組成にどの程度反映されているかなどの検討は十分でなく、それらと地域や階層との関連は明らかでない。

**分析の視座** 以上の課題を解決するうえで参考になるのが、陶邑窯・千里窯・その他の地方窯から一定の距離をもつ地域に形成されながらも、須恵器を大量に消費する大規模群集墳であると筆者は考えている。本論では、以上のような地理的特徴を備えた群集墳として近江湖西地域の志賀古墳群（滋賀県大津市）と美濃地域の船来山古墳群（岐阜県本巣市・岐阜市）を挙げ、主な分析の対象とする（図1）。主な対象時期は、群集墳の形成が盛行しはじめ、

なおかつ先述の須恵器生産の変容が生じたMT15～TK10型式期（田辺1966・1981）、実年代でいう6世紀前半代とし、適宜前後の時期とも比較を行う。

これらの古墳群では、時期や石室の形態、保有する副葬品の内容に応じて須恵器の供献量や器種に対する一定の選択性の存在が既に判明しており（吉田編1999、堀2019・2021など）、そこに製品の産地・系統がどの程度関連するかをみていくことで、各生産地から地方の群集墳へとどのように須恵器が供給されていたのかを確認できる可能性が高い。

**須恵器生産の系統差** 分析に先立って、検討の対象とする古墳時代後期の畿内中枢と近江・美濃地域にかけての須恵器生産の様相と製品の系統差を



①陶邑窯跡群（和泉） ②千里窯跡群（摂津）  
③鏡山窯跡群（近江） ④美濃須衛窯跡群（美濃）  
A. 志賀古墳群（近江） B. 船来山古墳群（美濃）

図1 対象遺跡の位置関係

概観する（図2）。

まず前提として、当該期には須恵器供膳具に大型化の様相が認められる（田辺1966・1981など）。畿内中枢の陶邑窯と千里窯では、とりわけ須恵器蓋坏の大型化の進捗については概ね共通の流れをみせるものの、陶邑窯では口径の拡大に伴って坏蓋肩部の稜が凹線化し、坏身の口縁端部が

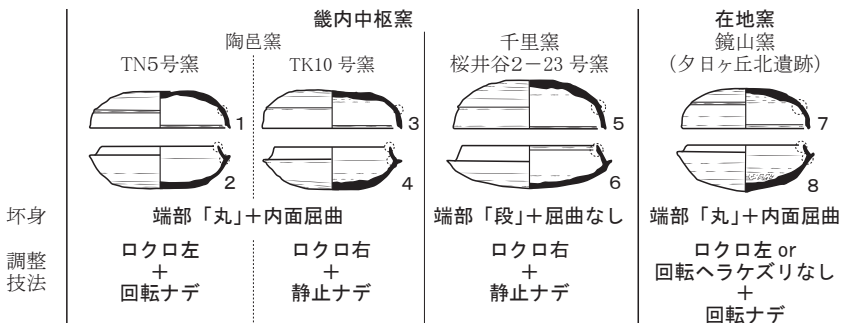


図2 6世紀前半における須恵器蓋坏生産の系統差

ら段が失われていくのに対し、千里窯ではそれらの形状を維持する傾向にある。また、長脚2段有蓋高坏における、①脚端部を上方に折り返して稜または段を形成し、②脚部に波状文を有する（「千里系高坏」）（田村2010、p.570）との特徴や、長脚1段無蓋高坏における、①脚端部を丸くおさめ、②坏部に波状文を有し、③脚基部が細身である、との特徴は千里窯に特有である可能性が高い。

加えて、近江湖東地域に分布する鏡山窯跡群（滋賀県野洲市・竜王町）も当該期に一定規模の須恵器生産を行っていたことが判明している（鈴木2021・2022など）。調査事例が少なく詳細は不明ながら、筆者による関連資料の実見の結果、①須恵器蓋坏が口径に対して器高が高い深手の形態を示すこと、②全体的に細部の形状が鈍く坏蓋肩部の稜や坏身の口縁端部の段が早くに失われること、③陶邑窯谷山池地区を除く大部分でロクロ右回転による須恵器製作が行われていた畿内中枢の生産地に対して、ロクロ左回転での製作が主流であったほか、蓋坏外面に回転ヘラケズリをほとんど施さない個体も散見されること、④長脚1段の有蓋高坏など独自器種を生産していたこと、を鏡山窯製品の特徴として捉えることができた。

詳細は後述するが、同様の特徴を有する製品は近江地域とその周辺に広く分布しており、湖東地域を超えた面的な広域供給を行っていた可能性が高い。

## 2. 近江志賀古墳群における須恵器の消費実態

### (1) 大通寺C-1号墳における須恵器の出土状況と産地・系統の対応関係

以上の生産地の状況を踏まえたうえで、まずは畿内地域に近接する近江湖西地域の志賀古墳群出土須恵器にかんする分析を進めたい。同古墳群は、正方形に近い平面プランを有する特徴的な形態の横穴式石室の採用や、ミニチュア炊飯具形土器の供献などから、韓半島由来の渡来系の群集墳と解釈されている（水野1969、花田1993など）。加えて、本論の分析の対象となる須恵器の出土例も多く、供献が活発であったとみなしうる。一方で、堅田窯跡

群など近隣の須恵器生産地の盛行は6世紀後半以降に下るため、群集墳形成初期については須恵器の入手を外部の生産地に依存していたと考えられる。

**大通寺C-1号墳出土須恵器の2系統** ここで最初に注目したいのが、渡来系の横穴式石室に大量の須恵器供献が認められた大通寺C-1号墳における須恵器の出土状況についてである(図3)。同古墳の発掘調査においては、遺物の出土位置から棺1~4までの各位置が復元されており、須恵器についてもどの個体・群がどの棺に伴うかがある程度識別されている。このうち棺1と棺3に伴う須恵器蓋環について、それぞれ①ロクロ回転方向、②内面中

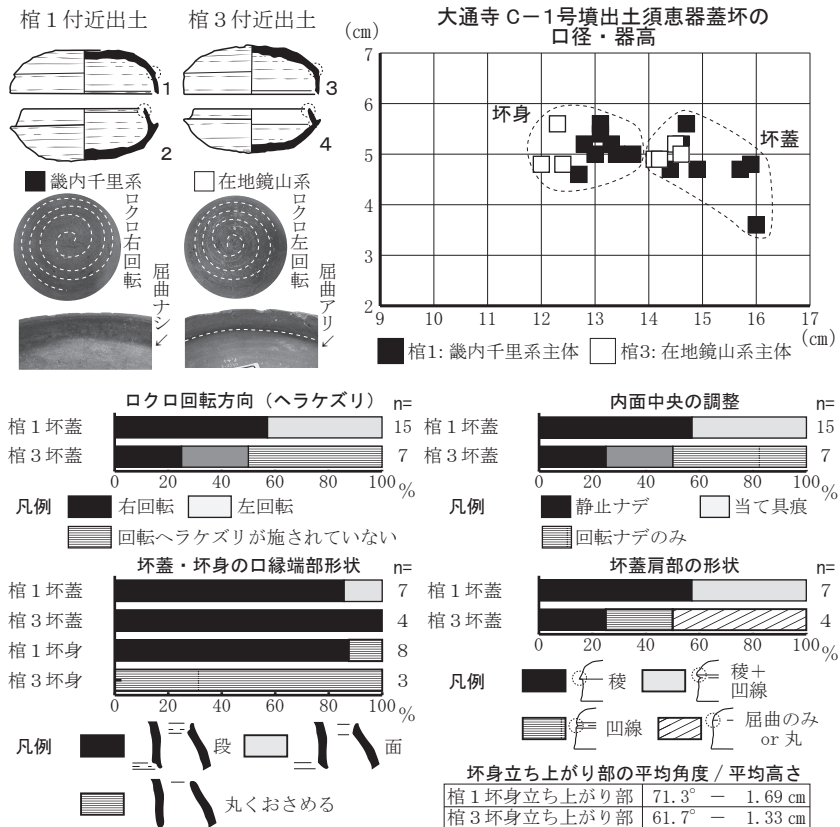


図3 大通寺C-1号墳出土須恵器蓋環の2系統

央の調整、③口径・器高、④口縁端部形状、⑤坏蓋肩部形状、⑥坏身立ち上がり部の角度と高さ、に着目して属性分析を行った。

結果は図3に示した。棺1に伴う蓋坏（図3-1・2）は、①ロクロ右回転が主体で、②内面中央には静止ナデが施されている場合が多い、といった特徴をもつ。また、③器高に対して口径が大きく、④蓋・身ともに口縁端部には段を有し、⑤坏蓋肩部の稜は鋭く、⑥坏身の立ち上がり部は1.5cm以上と高い。胎土の色調は淡灰色を呈し、黒色粒や透明度の高い白色礫を含む。

これに対して、棺3に伴う蓋坏（図3-3・4）は、①ロクロ左回転での製作が主体で回転ヘラケズリの施されていない個体が散見され、②内面中央は回転ナデのみで仕上げられている。加えて、③口径に対して器高が高く深手で、④坏身の口縁端部が丸いほか、⑤坏蓋肩部の稜は凹線化しているかあるいは消失しており、⑥坏身の立ち上がりは平均1.2cm程度と低い。胎土の色調は、やや焼成の甘い褐色の製品を除くと概ね暗灰色で、透明度の低い白色礫を多量に含む。

このうち③～⑥の差異は既往の須恵器編年においては時期差ともみなし得る。一方で、①・②や坏身の内面に鋭い「く」の字状の屈曲が存在するか否か（図3の写真）など、製作技法にかかわる要素が大きく異なっている点を重視すれば、多少の時期差は存在するにしても、6世紀前半の範疇のなかでの産地・系統差による部分が大きいと考えられる。前章に述べた生産地ごとの特徴と比較すると、棺1に伴う須恵器蓋坏は畿内中枢でも千里系の製品であり、棺3に伴う蓋坏は近江鏡山系の製品であると判断できるのである。<sup>1,2)</sup>

以上の蓋坏の分析の成果を踏まえつつ有蓋高坏についてもみていくと、まず蓋や坏部の様相はそれぞれの棺に伴う蓋坏の様相と対応する。棺1に伴う有蓋高坏は長脚2段で、脚端部を上方に折り返し、脚部に波状文が施されたいわゆる「千里系高坏」（田村2010、図4-1）であるのに対して、棺3に伴う有蓋高坏は長脚1段で鏡山系といえる（図4-2）。

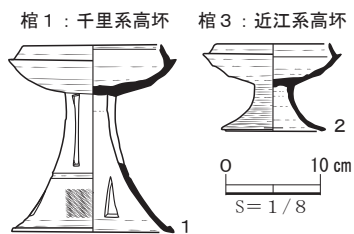


図4 大通寺C-1号墳出土  
須恵器高坏の2系統

したがって、棺1の被葬者には千里系が、棺3の被葬者には鏡山系がそれぞれ主体的に供給されていたと考えられよう。先に述べた剣菱形杏葉を含む金属製の副葬品は棺1の被葬者に伴うものが多いとされているため、大通寺C-1号墳では相対的に地位の高い被葬者の葬送儀礼に際してのみ、多量の千里系須恵器が用いられていたことになる。

## (2) 志賀古墳群出土須恵器の産地・系統と階層性

続いて、志賀古墳群全体に視野を広げて、出土須恵器の産地・系統にかんする分析を行う（図5・6）。まず蓋坏については、大型で細部の形状が鋭い千里系とみなしうる一群と、深手の形態で細部の形状が鈍い鏡山系とみなしうる一群の両方が認められ、数量的には後者が卓越する様相が認められた。

高坏についても同様である。大通寺C-1号墳以外では、千里系有蓋高坏は太鼓塚5号墳から1点出土しているのみ（図7-3）で、このほか、大通寺38号墳（図7-1）や曼荼羅山84号墳（図7-2）から千里系長脚無蓋高坏が出土している。ただし、全体的に出土個体数は僅少で、千里系高坏が複数個体出土した古墳は大通寺C-1号墳に限られる。

これに対して、鏡山系の長脚1段有蓋高坏（図7-5～7-9）については、上述の太鼓塚5号墳や同3号墳で十数個体が出土しているなど、志賀古墳群内での出土個体数は千里系高坏を大きく上回っている。単体での出土例が多

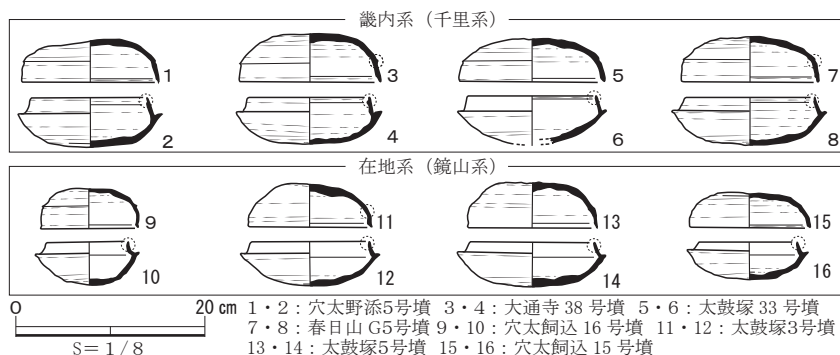


図5 志賀古墳群出土須恵器蓋坏の諸例

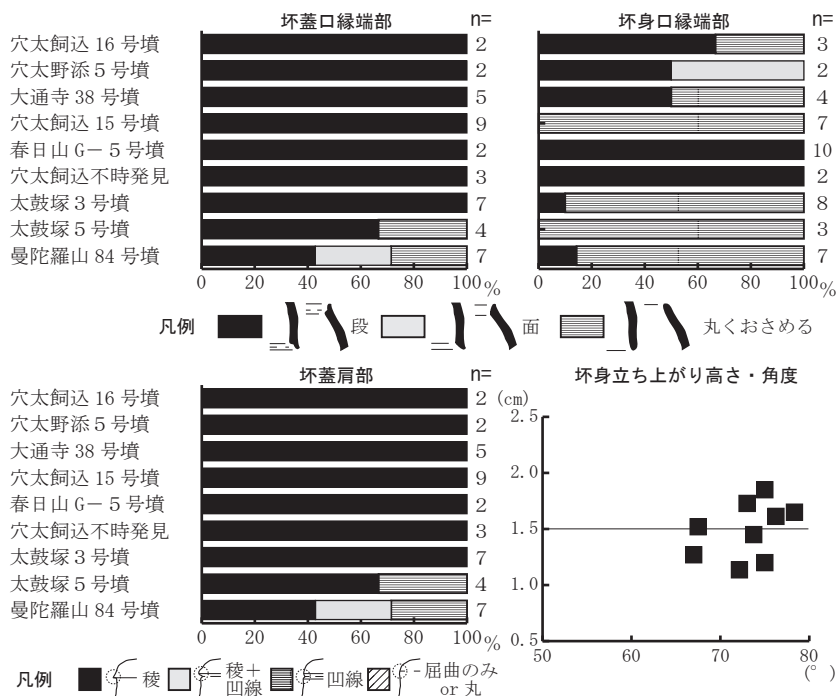


図6 志賀古墳群出土須恵器蓋環の諸属性

い千里系の製品とは様相を異にしているといえよう。

したがって、6世紀前半代の志賀古墳群では基本的に鏡山系が主体的に用いられており、千里系は数量的には従であったと考えられる。

### (3) 近江地域内における時期・小地域による須恵器供給状況の差異

**志賀古墳群における後期後半の様相** 6世紀後半代～7世紀前半にかけて、鏡山窯の操業がさらに大規模化し、大津近郊でも堅田窯跡群が本格的に操業を開始するなど、在地での須恵器生産が活性化する(林1991)。志賀古墳群内でも、やや口径や坏部高の縮小化が進んだ長脚1段有蓋高坏(図8-3・5)に加えて、太鼓塚26号墳・同30号墳等では、脚裾部径・裾部高がともに大きい形態の、畿内中枢ではあまり認められない特異な長脚2段高坏の出土が認められる

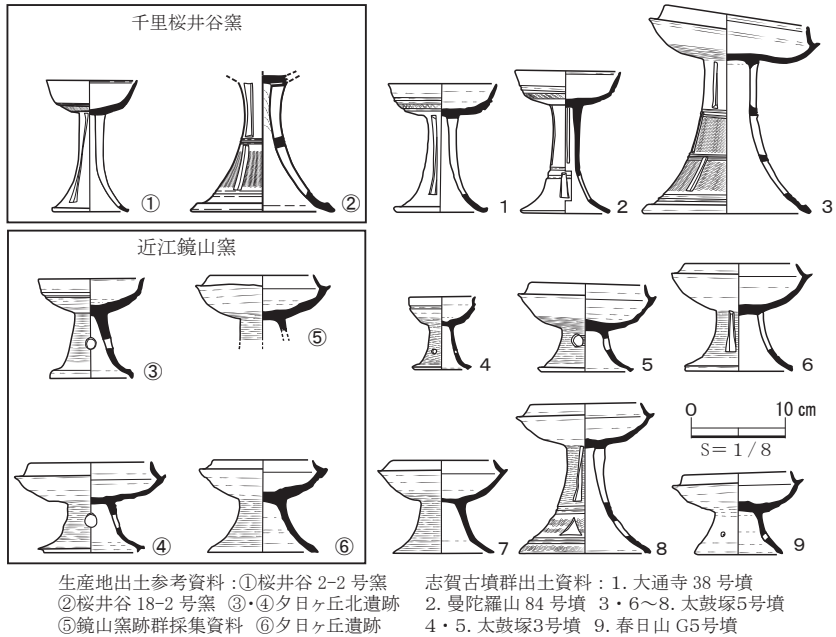


図7 志賀古墳群出土須恵器高坏の諸例と参考史料

(図8-4~8)。こうした製品は鏡山窯か、あるいは鏡山窯の影響を強く受けた生産地で製作されたと考えられるもの(図8-1・2)で、6世紀後半以降においては近江地域の在地窯である鏡山系の数量がますます増加した状況を復元できる。

他方、千里系をはじめとする畿内中枢の製品は抽出しがたく、実際にその供給量もさらに減少していたと推測できよう。つまり、志賀古墳群内に千里系須恵器が供給されていたのは6世紀前半に限定されていたのである。

**須恵器の供給にみる近江地域内における小地域差** 続いて、簡単にではあるが、近江地域内における他の後期古墳の様相と比較してみたい。

例えば湖東~湖南地域の栗東市和田古墳群(図9-9・10)や野洲市木部天神前古墳(図9-11・12)<sup>3)</sup>など、鏡山窯近接地域では同窯系と思われる須恵器が主体的に用いられている。さらに、湖西北部の高島市鴨稻荷山古墳(図9-7・8)など、鏡山窯とはやや離れた6世紀前半代の有力首長墳でも同窯系の須恵器が主体をなしていたようである。

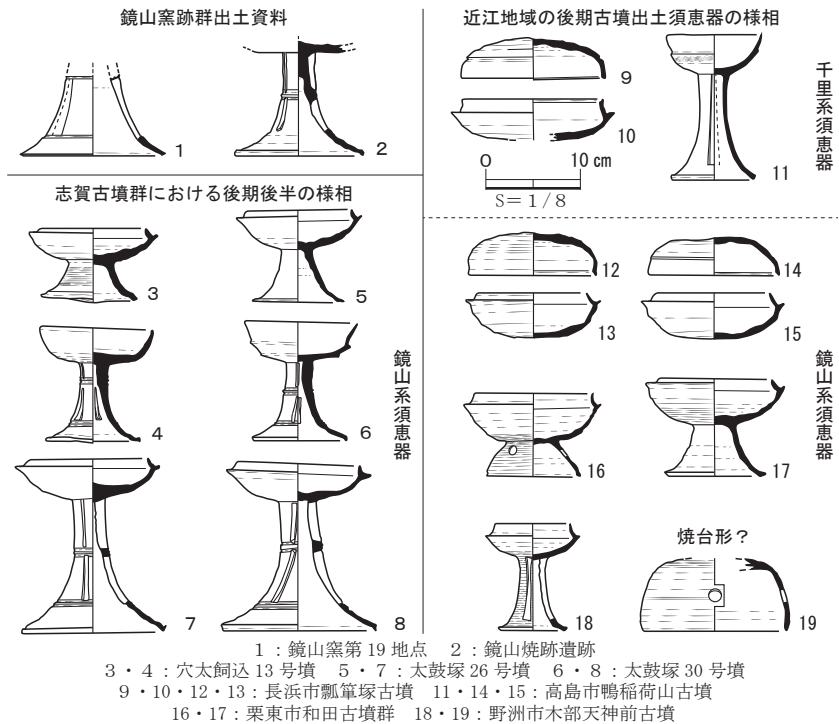


図8 近江地域の後期古墳出土須恵器の諸例とその比較資料

こうしたなかで、千里系は長浜市瓢箪塚古墳（周溝、図9-1・2）や先述の鴨稻荷山古墳（図9-3）で点的に出土している。とはいえ、そういった古墳でも基本的に主体をなして出土するのは鏡山系であり、6世紀後半代にはそれらにほぼ統一される。近江地域全体に視野を広げても、千里系須恵器の供給は6世紀前半に特異な現象であったと考えられる。

### 3. 美濃船来山古墳群における須恵器の消費実態

#### (1) 船来山O272号墳出土須恵器の産地・系統

次に、志賀古墳群とは鏡山窯跡群を挟んで対称的な位置に所在する美濃船来山古墳群出土須恵器についての分析を行う。船来山古墳群の周辺において

は、6世紀後半～7世紀にかけて各務原市美濃須衛窯跡群や岐阜市須山窯跡群が成立・発展する（渡辺1986・1996）ものの、6世紀前半までは須恵器生産地が周囲に存在しない状況であり、志賀古墳群と同様に須恵器の調達を外部に依存していた。実際に出土須恵器は畿内系を主体とし、地理的に近接する尾張猿投窯系の製品は少ないとの指摘があり（吉田編1999など）、畿内およびその周縁の生産地からの供給が主であったとされている。こうした外部依存の状態にもかかわらず、ほぼすべての後期古墳で須恵器が複数個体出土しているなど、出土量は古墳群全体を通して比較的多い。

**船来山O272号墳出土須恵器の2系統** そのなかでも、本節で主な対象とする船来山O272号墳では、約110～120個体と傑出した量の須恵器が出土した。

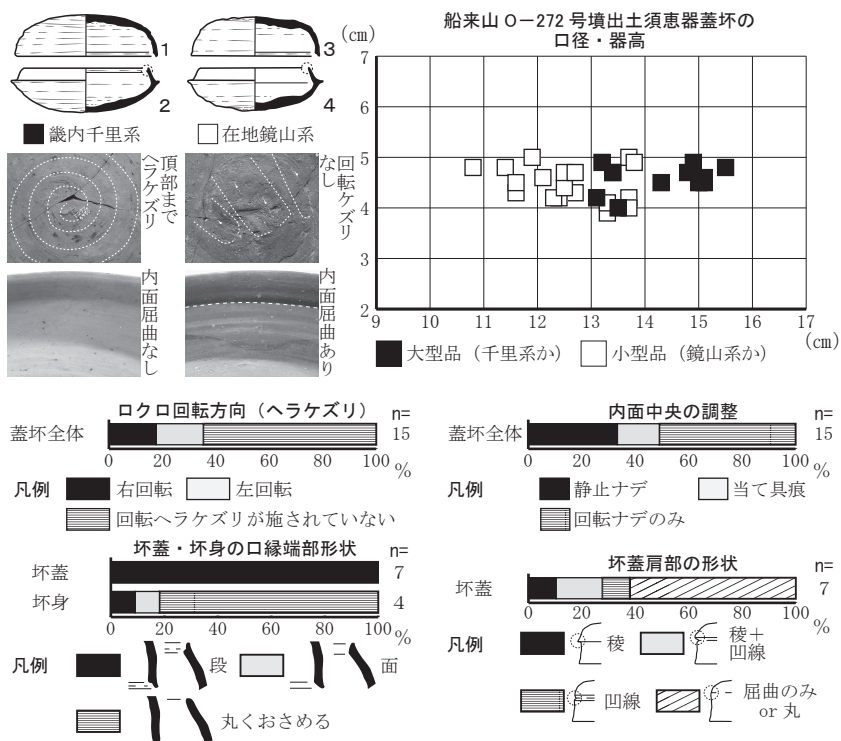


図9 船来山O272号墳出土須恵器蓋環の2系統

まずは蓋坏についてみていくと（図10）、大通寺C-1号墳の場合と同様に、天井部・底部の調整については、ロクロ右回転による回転ヘラケズリが施されている蓋坏の一群（図10-1・2）に対し、ロクロ左回転による回転ヘラケズリが施されているか、あるいはそもそも回転ヘラケズリ自体が施されていない個体も多い蓋坏の一群が存在する（図10-3・4）。さらに前者の蓋坏は大型でかつ細部の形状が鋭く、後者の蓋坏は深手の形態で細部の形状が鈍いなど、形態的にも分類可能である。また、胎土の様相としても前者淡い灰色を呈する胎土に若干の黑色粒や白色礫を含むのに対し、後者は暗灰色の胎土に白色礫を多量に含む様相を呈している。以上に鑑みて、前者の蓋坏は千里系、後者の蓋坏は鏡山系と判断できる。

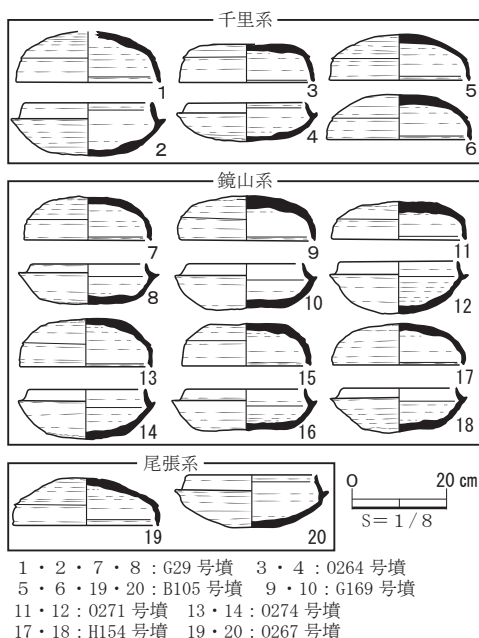


図10 船来山古墳群出土須恵器蓋坏の諸例

高坏については、前者と系統を同じくする製品は認められない。一方で、鏡山系の蓋坏と蓋や坏部の様相が酷似する長脚1段有蓋高坏の出土は十数セットにも及んでいる（後述、図13-4）。したがって、船来山O272号墳では鏡山系が主体的に用いられた一方で、ごく少数ながら千里系も供給されていたとみなしうる。

## (2) 船来山古墳群出土須恵器の産地・系統

続いて、船来山古墳群全体に視野を広げたい。図10に示した須恵器蓋坏各部の様相からみて、①ロクロ左回転での製作+回転ヘラケズリを施さない、

④坏身の口縁端部が丸い、⑤坏蓋肩部の稜が凹線化しているか、あるいは省略されている、⑥坏身の立ち上がりが低い、など鏡山系の蓋坏が量的に大多数を占めると考えられる。一方で、船来山G29号墳や同O264号墳では、1セット程度の少数ながら、①ロクロ右回転での広範囲の回転ヘラケズリ、④坏身

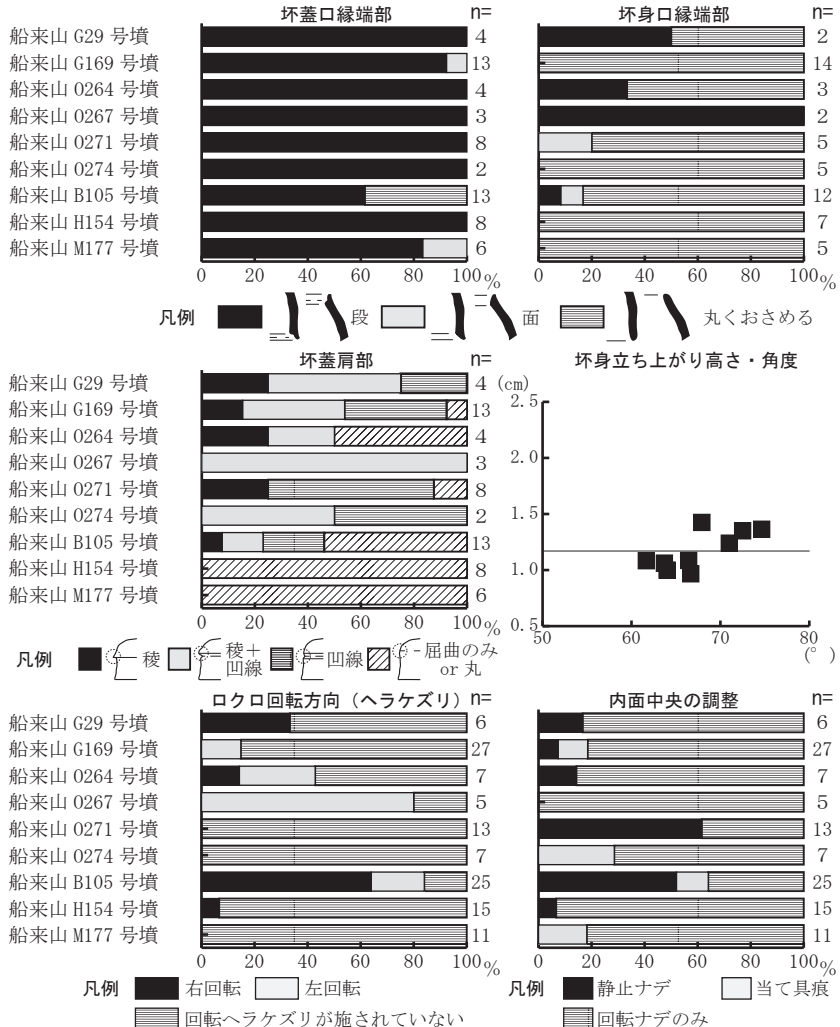


図 11 船来山古墳群出土須恵器蓋坏の諸属性

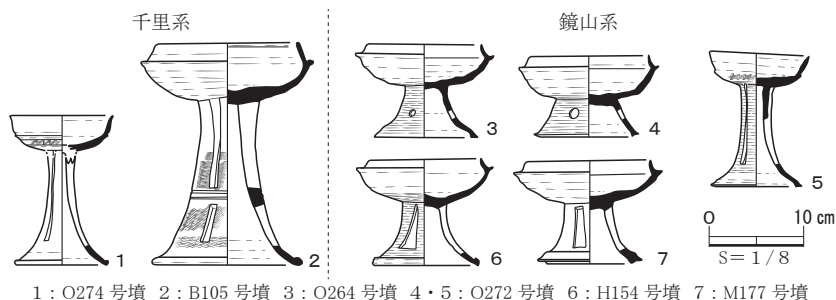


図 12 船来山古墳群出土須恵器高坏の諸例

の口縁端部に段をもつ、⑤坏蓋肩部の稜の突出が強い、⑥坏身の立ち上がりが高い、などの特徴を有する千里系の出土が確認できる（図10-1～6）。

また、④～⑥などは千里系と共通する様相を示しながらも、ロクロ左回転での製作が主（北野ほか2002）で、器高が高い傾向にある蓋坏がごく少数みられ、これらは尾張系と判断できる（図10-19・20）。

高坏についても同様で、志賀古墳群でも多量に出土していた鏡山系の長脚1段有蓋高坏が分析の対象とした10基の古墳のうち5基に認められる（図12-3～7）。一方で、千里系長脚1段無蓋高坏がO274号墳（図12-1）、千里系有蓋高坏がB105号墳（図12-2）から各1個体出土しているのみで、1つの古墳から多量に出土する場合の多い長脚1段有蓋高坏とは異なり、分布は限定的といえる。

つまり、6世紀前半の船来山古墳群では鏡山系が主体的に用いられ、千里系の供給は客体的であったのである。

### (3) 美濃地域内における時期・小地域による須恵器供給状況の差異

6世紀後半代には美濃須衛窯や須山窯が操業を開始する。これに伴って、船来山古墳群でも美濃系の須恵器に特徴的な灰白色で軟質の胎土を呈する製品、例えば無窓の長脚有蓋高坏などが量的に増加する（図13-3～6）とともに、一部に鏡山系と思しき脚裾部に特徴のある長脚2段有蓋高坏も供給されている（図13-1・2）。一方で、千里系と考えられる須恵器は抽出しがたくなる。在地系の製品がますます主体的な状況となったのだろう。

加えて、周辺の小地域の状況を確認しておくとして、例えば関市陽徳寺裏山1号墳においては、鏡山系の供膳具を主体としつつも、上下段のスカシ孔が三角形を呈する尾張猿投窯系の長脚2段有蓋高坏等が出土しており（図13-9・12）、尾張系の少ない船来山古墳群とは異なる状況といえる。また、同市塚原古墳群では、6世紀前半に位置づけられる1号墳で尾張系と鏡山系の須恵器が出土している（図13-7・8・10・11）一方で、6世紀後半～7世紀前半にかけては美濃系の製品が主体をなすようになる（図13-13・14）。

以上をまとめると、在地窯が操業を開始していない6世紀前半代の美濃地域へは、隣接する近江地域の鏡山系が主体的に供給され、地域に応じて畿内中樞の千里系や尾張猿投系の須恵器が客体的に供給されていた状況が復元できる。しかしながら、6世紀後半代に在地窯が本格的な操業を開始すると、他地域系の大部分が美濃系に一斉に置換される。つまり、美濃地域に対する千里系須恵器の供給は、6世紀前半の船来山古墳群の一部に限定された特異な現象であったと考えられるのである。

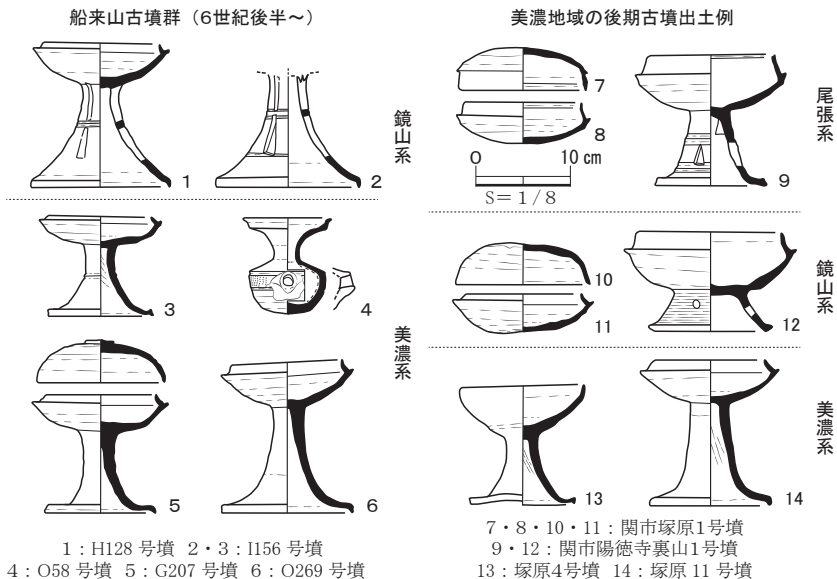


図13 美濃地域の後期古墳出土須恵器の諸例とその比較資料

#### 4. 出土須恵器の産地・系統と階層差

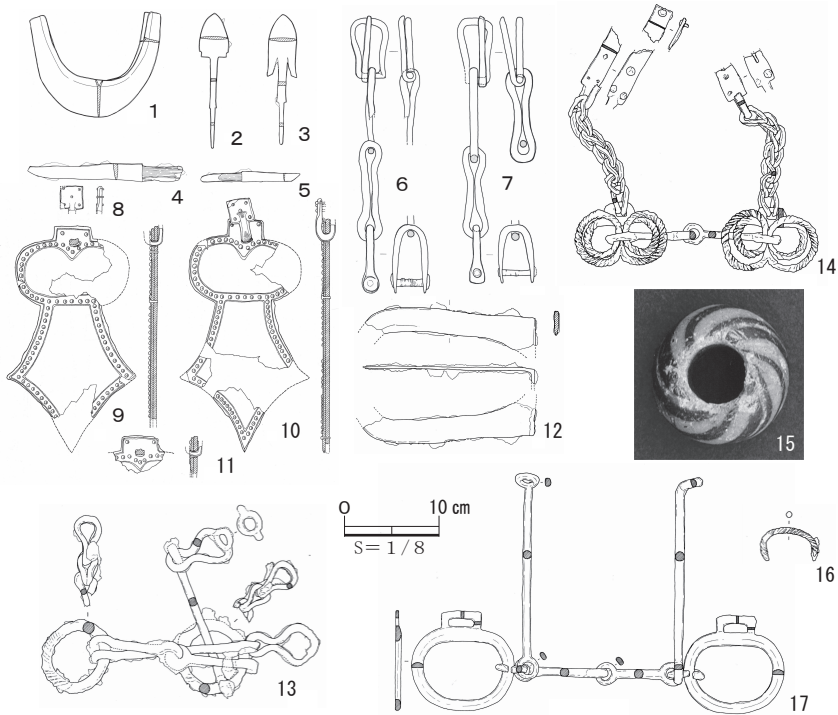
##### (1) その他の要素との関連

前章までの検討によって、6世紀前半代の近江地域の志賀古墳群、美濃地域の船来山古墳群では、基本的には近江鏡山系の須恵器が主体的に供給され、ごく一部の古墳にのみ、少数の千里系須恵器が供給されていた状況が復元できた。ここで、上述の出土傾向と石室形態やその他の副葬品などの要素がどのように関連しているのかについて検討を加えたい（図14）。

**志賀古墳群における階層性と須恵器の系統** 先に述べたように、志賀古墳群においては正方形プランの横穴式石室の採用やミニチュア炊飯具の供献が特徴的である一方、通有の群集墳においては普遍的に出土する金属製の副葬品の出土はまばらである（堀2017・2019・2021など）。こうした状況のなかで、千里系は鉄製武器・農工具・馬具等を有する古墳から出土する傾向が強い（表1）<sup>4)</sup>。加えて、千里系の蓋坏・高坏を複数個体（セット）保有する大通寺C-1号墳棺1の被葬者は、志賀古墳群全体においても傑出した量・質の副葬品を有しているといえる。

以上をまとめると、千里系は金属製の副葬品類と共伴するなど、相対的に上位の古墳にのみもたらされる傾向にあったと考えられ、複数個体を供献したのはそのなかでも最上位層に限られていたことが想定できる。

**船来山古墳群における階層性と須恵器の系統** 次に、船来山古墳群における産地・系統別の須恵器の出土傾向と石室形態やその他の副葬品などの要素との関連性について検討を加えたい。前提として、船来山古墳群では鉄製武器・馬具等が比較的豊富に出土する傾向（恩田編2017）があり、本論で分析の対象とした古墳でも、少なくとも何らかの鉄製品が1つ以上出土している。志賀古墳群とは副葬品の保有状況が異なっているといえる。また、埋葬施設の形態としては、畿内地域で普遍的に認められる畿内型（系）横穴式石室ではなく、竪穴系に近い形態のものや、片袖式など畿内系の影響を受けつつも胴張状の玄室形態や玄門に框石を有する点で異なる特徴をもつ「有階式



1～5：大通寺38号墳 6・7：春日山G-5号墳 8～11：大通寺C-1号墳（棺1）  
12：曼陀羅山84号墳 13：船来山O264号墳 14：船来山G29号墳 15～17：船来山O272号墳

図14 千里系須恵器と共伴する副葬品の諸例

表1 志賀古墳群における埋葬施設・出土遺物の様相

古墳名	近江系蓋坏	近江系高坏	千里系蓋坏	千里系高坏	埋葬施設	鉄製品	馬具	備考
穴太飼込16	あり				畿内系か			
穴太野添5			2セット		畿内系片袖			ミニ炊
穴太飼込 S36年度調査			多	長脚1段無	破壊	?	?	ミニ炊
大通寺38	あり		多	長脚1段無	畿内系片袖	●		
春日山G-5		あり	2セット	?	畿内系片袖	●	●	
穴太飼込15	多		あり		畿内系片袖			ミニ炊
太鼓塚3	多	多			畿内系片袖			ミニ炊
太鼓塚5	あり	多※		長脚3段有	渡来系			※含2段有 ミニ炊
大通寺C-1	あり	多	多	長脚2段有 ※	渡来系	●	●	※複数セット +ミニ炊
曼陀羅山84	あり		あり	長脚2段無	畿内系片袖	●		

表2 船来山古墳群における埋葬施設・出土遺物の様相

古墳名	近江系 蓋杯	近江系 高杯	千里系 蓋杯	千里系高杯	埋葬施設	鉄製品	馬具	備考
G-29号墳	あり		1セット		在地系か	●	●	
G-169号墳	多				在地系無袖	●		
O-264号墳	あり	あり			在地系か	●	●	
O-267号墳		多			在地系か	●		尾張系蓋杯
O-271号墳	多				在地系無袖	●		
O-274号墳	少			長脚1段無	有階式片袖	●		石室半壊
O-272号墳	特に多い	特に多い	多		有階式片袖※1	●※2	●	1:赤彩 2:振り環頭
B-105号墳	あり		あり	長脚2段有	有階式片袖か	●		石室半壊
H-154号墳	多	多			有階式片袖か	●		
M-177号墳	あり	多			在地系か	●		

石室」(藤井2022、p.261)<sup>5)</sup>など、やや独自性の強い横穴式石室が採用されている。

以上の事実を踏まえたうえで、須恵器と他の要素との共伴関係をみていくと、石室の遺存状況に起因すると思われる例外はあるものの、千里系須恵器を有するG29号墳・O264号墳・O272号墳では、鉄製武器に加えて鉄製馬具を保有する。また、O272号墳やO274号墳の有階式石室内部には赤彩が施されていた。さらに、千里系須恵器を複数セット有するO272号墳では、上述の諸要素に加えて振り環頭や斑紋トンボ玉など畿内中枢から入手した可能性の高い稀少な副葬品類を保有しており、船来山古墳群内でも傑出した上位階層墓であることが想定できる(表2)。つまり、千里系の供給は上位階層の古墳に限定されており、複数を入手しえたのは、さらに限られた最上位層であったと考えられるのである。

## (2) 生産時の一括性の有無

前節で述べた須恵器の産地・系統差と階層差との一定程度の関連性を踏まえたうえで、本節では再び須恵器の供給に目を向け、各古墳における須恵器の出土状況が、製作・焼成時の一括性をどの程度保っているのか、それが被葬者の階層とどの程度関連しているのかについて検討を行う。

先学の指摘では、古墳出土須恵器において胎土・形態・製作技法などが複

数個体間・複数器種間にわたって共通する場合、そういった諸要素が類似関係にない場合と比較して、同一工人による製作や焼成の同時性が窺われ、通常とは異なる、一貫して葬祭用の須恵器としての生産・供給が行われたことを想定する（石井2007、木許2009など）。焼成時の状態が良好に保たれていた窯跡では、共通の胎土・形態・製作技法が認められる須恵器蓋坏が蓋一身のセット関係を保ったまま一定の範囲内でまとめて窯詰めされていた状況が判明しており（江浦1995、岩越2016）、そのなかには当初から古墳への供給を見越した製品群が存在していた可能性がある。

以上に述べたような、製作・焼成時の一括性を保持したまま供給された須恵器の一群は、志賀古墳群・船来山古墳群の双方で普遍的に認められる（図15）。とりわけ本論で鏡山系とした長脚1段有蓋高坏については、表1・2で読み取ることのできる階層差を加味しても、基本的に一括性を保ったまま出土している。一方で、千里系については、複数個体からなるセット関係を保ったまま出土した古墳は大通寺C-1号墳と船来山

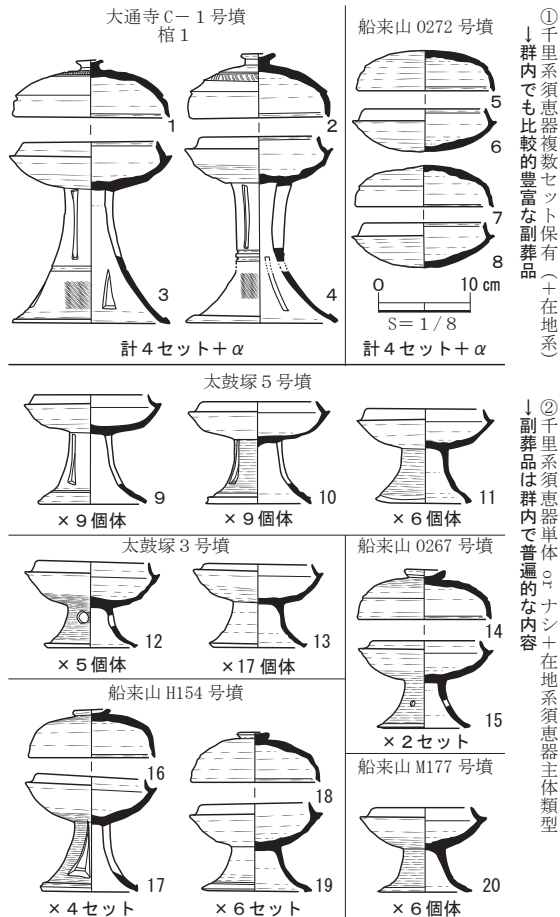


図15 対象古墳群における一括性の高い須恵器

O272号墳に限られる。

この事実からうかがうことができるのは、葬送儀礼に供する須恵器を調達するにあたって、①鏡山系は被葬者の階層にかかわらず一定程度は自由に供給を受けることができたのに対し、②千里系については限られた上位階層の被葬者のみが入手可能なものであって、さらに、③それを複数セット供献できたのは群集墳内でも最上位に限定されていたという、階層差と結びついた須恵器供給システムの存在である<sup>6)</sup>。したがって、中央政権との結びつきの強弱が千里系須恵器の有無に表れていると考えられよう。

## 5. 群集墳にみる古墳時代後期の須恵器生産・供給とその特質

ここまで、大規模群集墳である志賀古墳群と船来山古墳群を主な分析の対象としながら、6世紀前半代の近江・美濃地域に対しては近江鏡山系須恵器が主体的に供給されており、少数ながら畿内中枢の千里系須恵器が供給されていた状況を復元した。千里系の供給は他の副葬品の保有状況からみて階層的に上位の古墳に限定され、とりわけ一括性の高い複数セットの千里系須恵器が供給されているのは群集墳内でも最上位に限られている。これに対して、鏡山系は豊富な副葬品をもたない比較的低位階層の古墳であっても一括性を保ったまま供給されているなど、葬祭用の須恵器の調達に際して、地方窯の製品はある程度自由に入手しえたと考えられる。

しかしながら、他の後期古墳出土資料と比較すると、以上のような、畿内中枢の須恵器が階層関係と結びついて在地系の須恵器と区別されていた供給状況は6世紀前半の特定の小地域にのみ認められる現象である可能性が高く、当該期の手工業生産と製品の供給の特質として捉えることができる。

すなわち、胎土分析等の結果を参照しても、須恵器生産の黎明期を除く5世紀代には百舌鳥・古市古墳群に近接する陶邑窯が製品の供給・技術波及の両面で明確な集約的体制での須恵器生産を行っていた（中村1981、城ヶ谷2012、三辻・中村・犬木2016など）のに対し、本稿での対象時期をさらに

下の6世紀後半以降については、地方の須恵器生産地が主体性を増す（菱田2007、城ヶ谷2012など）。美濃地域の須恵器が「美濃国」の刻印をもって平城京域に貢納されていた事実はその延長線上にある。

一方、6世紀前半については、陶邑窯以外に列島各地須恵器生産地が成立・発展し、主に近接地域への供給を担い始める（岩越2018など）。鏡山系のように地方窯製品の遠隔供給がなされていた様相は、上述の6世紀後半以降の状況への萌芽とみなしうる。ただし、6世紀前半の大王陵と目される高槻市今城塚古墳<sup>7)</sup>が造営される畿内北部においては、千里窯跡群が陶邑窯に匹敵する大規模な生産・遠隔地への供給を担っていた（田村2010）。つまり、6世紀前半代は地域側を主体とする須恵器生産と中央政権との関係性が強い須恵器生産とが併存した段階であったと評価しうる<sup>8)</sup>。

したがって、近江・美濃地域の大規模群集墳で6世紀前半に限って認められる千里系須恵器の供給と鏡山系須恵器との共存は、当該期の手工業生産にみられる過渡期的性格を端的に表す現象であり、群集墳でもより上位の被葬者に対する葬送儀礼においては、王権中枢にかかわる須恵器生産地との関係性を読み取ることができるのである。

## おわりに

本稿では、窯跡出土資料の分析に基づく生産地別の製品の特徴や独自性を媒介に、近江・美濃地域の大規模群集墳への須恵器の供給状況の復元を試みた。その結果、6世紀前半においては畿内中枢の千里系須恵器と在地の鏡山系須恵器とではその供給システムに階層差によると思われる明確な差異が存在することが推測できた。このことは、古墳時代後期前葉の須恵器生産が明確な中心周縁関係を示す存在形態から地域側を主体とする形へと変遷する過渡期段階にあることと関連していると考えられる。

一方で、当該期における須恵器生産と供給の特質に迫るうえでは、本稿で対象とした地域以外についても積極的な検討を行う必要がある。例えば近江・

美濃地域と同じく畿内周縁に所在する播磨地域や紀伊地域でも地方窯での須恵器生産が行われており、在地の大規模群集墳や首長墳を含む横穴式石室墳への供給を担っていた可能性が高い。こうした地域において、千里系など畿内中核地域で生産された製品がどのように分布するのかに着目し、その分布状況の地域差について見識を深めるとともに、前後の時期との総合的な比較を進めたいと考えている。このことを今後の課題として、筆をおきたい。

### 〔謝辞〕

本論の執筆にあたり、大阪大学大学院人文学研究科の福永伸哉先生、高橋照彦先生には懇切丁寧な指導を賜りました。謹んで感謝を申し上げます。また、上田直弥助教をはじめ、大阪大学考古学研究室を卒業・修了された諸先輩や在学中の諸氏には数々の有益な助言をいただきました。

関連資料の実見に際しては下記の諸氏・機関のお世話になりました。記して感謝を申し上げます(五十音順・敬称略)。浅田尚子、今西康宏、内田真雄、恩田知美、角 健一、橋田正徳、小堀 僚、清水 篤、陣内高志、鈴木 茂、三宅 弘、三好裕太郎、本吉恵理子、和澄浩介、本巢市立古墳と柿の館、滋賀県立安土城考古博物館、滋賀県立琵琶湖文化博物館、高槻市立今城塚古代歴史館、豊中市教育委員会・豊中市立郷土資料館、野洲市教育委員会・野洲市歴史民俗博物館、龍谷大学付属平安高等学校。

とりわけ野洲市教育委員会の鈴木 茂氏には、鏡山窯関連資料の実見や同窯系製品の供給先の同定にかんして様々なご高配と助言を賜りました。

### 〔註〕

- 1) 本論における「○○系須恵器」は、「○○窯産または○○窯の影響を強く受けた生産地で製作された須恵器」を指す。また、以下では「須恵器」を省略して単に「○○系」と呼称する場合もある。
- 2) 棺1に伴う土器群のなかに1点のみ鏡山系の坏蓋が含まれている(大崎編2005、図版7-5)。その出土位置を図面で確認すると、棺1と棺3のそれぞれの推定位置のちょうど中間地点であることが判明した。したがって、当該個体は棺3に伴うものであった可能性が高いと考えている。
- 3) 木部天神前古墳では須恵器の焼成の際に用いる焼台と推定される製品が出土しており(図9-12)、近隣に所在する鏡山窯と近い関係性を有していた可能

性が高い。当該期において周辺に同程度の内容を有する古墳はみられないことから、被葬者には須恵器生産の管轄を担う首長が想定できる。

- 4) 太鼓塚5号墳は例外といえるものの、全体的な須恵器の出土個体数が志賀古墳群中でも群を抜いて多い。
- 5) 有階式石室は近江湖東～湖南地域や伊勢地域に求められるとされており(藤井2022)、例えば湖東地域の木部天神前古墳の主体部は赤彩の施された有階式石室(辻川1992)であった。同タイプの石室を構築する船来山古墳群で近江鏡山系の須恵器が多量に用いられている背景には、木部天神前古墳をはじめとする近江湖東～湖南地域とのつながりを想定すべきであろう。
- 6) したがって、当該期の須恵器供給には、①ある程度地域間交流のなかで自立的な製品の供給・入手が図られている場合と、②中央から他の威信財とともに配布される場合との2パターンが想定できる。
- 7) 今城塚古墳の埴輪祭祀区や造出し部に供献されていた須恵器については、型式学的特徴の観察結果から大半が千里系であると考えている。
- 8) 本論で分析の主な対象とした近江地域・美濃地域は、6世紀前半の継体大王本人あるいは近親者の出自地域としても知られている。当該期の威信財は文献史上で把握される継体大王関連地域に偏在する傾向があるとされており(福永2005、高松2007)、千里系須恵器についても同様の可能性が高いと筆者は考えている。

#### [参考文献]

- 石井智大 2007「古墳への須恵器の供給とその背景」『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告 第4冊、大阪大学勝福寺古墳発掘調査団
- 岩越陽平 2016「桜井谷窯跡群出土資料からみる古墳時代後期の須恵器生産」『2015年度 4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム』成果報告書、明治大学大学院文学研究科
- 岩越陽平 2018「6世紀初頭における地方窯の分布とその背景に関する考察」『待兼山考古学論集Ⅲ－大阪大学考古学研究室30周年記念論集－』大阪大学考古学研究室
- 岩越陽平 2021「器種構成からみた群集墳の須恵器副葬について－大和・河内地域のいくつかの群集墳の事例から－」『群集墳研究の新視角 群集墳からみた古墳時代の社会と集団』六一書房
- 植野浩三 1998「五世紀後半代から六世紀前半代における須恵器生産の拡大」『文化財學報』第16集、奈良大学文化財学科

- 江浦 洋 1995「陶邑周辺部における須恵器生産点描」『日置荘遺跡－自然科学・考察編－』大阪府教育委員会・大阪府文化財センター
- 北野博司・畑中英二ほか 2002「須恵器の成形におけるロクロ回転」『日本考古学協会第68回(2002年度)総会 研究発表要旨』日本考古学協会
- 北山峰生 2020「横穴式石室定着前後の土器副葬」『横穴式石室の研究』同成社
- 木許 守 2009「群集墳被葬者層における須恵器の流通について」『考古学研究』第56巻3号、考古学研究会
- 小林行雄 1949「黄泉戸喫」『考古学集』第2冊 東京考古学会
- 佐野由美子 2009「鏡山古窯址群の成立と操業集団」『考古学と地域文化』一山典還暦記念論集、一山典還暦記念論集刊行会
- 白石太一郎 1975「ことどわたし考－横穴式石室墳の埋葬儀礼をめぐる－」『橿原考古学研究所論集』創立三十五周年記念、吉川弘文館
- 城ヶ谷和広 2012「③製陶」『時代を支えた生産と技術』古墳時代の考古学5、同成社
- 高松雅文 2007「振り環頭大刀と古墳時代後期の政治的動向」『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告 第4冊、大阪大学勝福寺古墳発掘調査団
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 田村美沙 2010「千里窯における古墳時代後期の須恵器生産とその供給」『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学考古学友の会
- 寺前直人 2005「後期古墳における土器副葬の階層性」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団
- 寺前直人 2012「横穴式石室導入前後の古墳における土器組成」『駒沢史学』第77号、駒沢史学会
- 中村 浩 1978「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑』Ⅲ 大阪府文化財調査報告書 第30輯、大阪府教育委員会・大阪府文化財センター
- 花田勝広 1993「渡来人の集落と墓域」『考古学研究』第39巻第4号、考古学研究会
- 土生田純之 1994「畿内型石室の成立と伝播」『ヤマト王権と交流の諸相』5、名著出版
- 林 純 1991「近江における須恵器生産の特質」『滋賀考古』第6号、滋賀考古学研究会
- 菱田哲郎 1992「須恵器生産の拡散と工人の動向」『考古学研究』第39巻第3号、考古学研究会
- 福永伸哉 2005「いわゆる継体朝期における威信財変化とその意義」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第3冊、大阪大学稲荷塚古墳

## 発掘調査団

- 藤井康隆 2022『濃尾地方の古墳時代』東京堂出版
- 藤原 学 1985「須恵器からみた古墳時代葬制の変遷とその意義」『末永先生米壽記念献呈記念論文集』乾
- 堀 真人 2019「志賀古墳群における葬送儀礼－副葬土器配置の検討から－」『紀要』32、公益財団法人滋賀県文化財保護協会
- 堀 真人 2021「横穴式石室の空間設計の検討－志賀古墳群における平面プランと副葬土器」『紀要』34、公益財団法人滋賀県文化財保護協会
- 水野正好 1969「滋賀郡所在の漢人系帰化氏族とその墓制」『滋賀県文化財調査報告』第4冊、滋賀県教育委員会
- 三辻利一・中村 浩・犬木 努 2016「陶邑産須恵器の列島各地への広域供給－素材粘土の化学特性の分析から－」『志学台考古』第16号、大阪大谷大学歴史文化学科
- 森本 徹 2012「横穴式石室と土器」『菟原Ⅱ』森岡秀人さん還暦記念論文集、菟原刊行会
- 渡辺博人 1986「窯業生産」『各務原市史通史編 自然・原始・古代・中世』各務原市
- 渡辺博人 1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相－蓋坏の型式設定とその編年試案－」『美濃の考古学』創刊号、「美濃の考古学」刊行会

## 〔報告書出典〕

- 近江地域**：大崎哲人・畑中英二ほか編 1995『大通寺古墳群』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会／大崎康文編 2005『大通寺古墳群』滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会／黒坂秀樹 1986「洞戸朱塚遺跡」『高月町埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集、滋賀県高月町教育委員会／佐伯英樹編 1998『和田古墳群』栗東町教育委員会／田中久雄編 1992『太鼓塚遺跡発掘調査報告書』大津市教育委員会／辻川哲朗編 2006『穴太飼込古墳群』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会／辻 広志 1992「中主町・木部天神前古墳の調査」『滋賀考古』第8号、滋賀考古学研究会／富田尚弘編 2008『鏡山古窯址群分布調査報告書』竜王町教育委員会／西中久典編 2015『曼陀羅山古墳群発掘調査報告書』大津市教育委員会／西中久典編 2017『穴太野添古墳群発掘調査報告書』大津市教育委員会／濱田耕作・梅原末治 1923『近江國高島郡水尾村の古墳』京都帝国大学文学部研究報告8／松浦俊和編 1980『太鼓塚古墳群』大津市教育委員会／横田洋三編 2002『春日山古墳群』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財

保護協会／吉永真彦編 1982『滋賀里・穴太地区遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』大津市教育委員会 美濃地域：恩田知美編 2017『本巣市船来山古墳群総括報告書』本巣市教育委員会／恩田裕之編 2007『船来山古墳群』岐阜西開発株式会社・財団法人岐阜市教育文化振興事業団／吉田英敏・藪下 浩 1976『陽徳寺裏山古墳群』岐阜県中小企業福祉センター・関市教育委員会／吉田英敏・篠原英政 1989『塚原遺跡・塚原古墳群』関市教育委員会／吉田英敏編 1999『船来山古墳群』岐阜県本巣郡糸貫町教育委員会・本巣町教育委員会(船来山古墳群発掘調査団) その他：福永伸哉・北條芳隆編 1991『桜井谷窯跡群 2-23 号窯跡』豊中市教育委員会／白石耕治編 1992『陶邑古窯址群 - 谷山池地区の調査 -』和泉丘陵内遺跡調査会

[図版出典]掲載図面は筆者が作成し、須恵器の実測図については再トレースを行っている。／図 2：白石編 1992・田辺 1981・福永ほか編 1991・鈴木 2021、図 3：筆者撮影・大崎編 2005、図 4：大崎編 2005、図 6：西中編 2007・大崎ほか編 1995・田中編 1992・横田編 2002・吉永編 1982・松浦編 1980、図 7：筆者実測・鈴木 2021・大崎ほか編 1995・西中編 2015・松浦編 1980・横田編 2002、図 8：筆者実測・富田編 2008、黒坂 1986、濱田・梅原 1923・佐伯編 1998・辻川 1992、図 9：筆者撮影・吉田編 1999、図 10・12：吉田編 1999・恩田編 2007、図 14：吉田編 1999・吉田ほか編 1976・吉田ほか編 1989、図 14：大崎ほか編 1995・横田編 2002・大崎編 2005・西中編 2015・吉田編 1999、図 15：大崎編 2005・吉田編 1999・松浦編 1999／表 1・2：筆者作成

(大学院人文学研究科博士後期課程学生)

## SUMMARY

The Supply and its Characteristics of Sue ware  
for Large Scale Cluster Tombs  
- The Omi and Mino Areas in the Late Kofun Period -

Yuya WAGATSUMA

For the 6th century, cluster of burial mounds (Gunshufun) with side-hole stone chambers (Yokoanashiki-Sekishitsu), earthenware called Sue ware is supplied as a burial item. While Sue ware produced at the Kagamiyama Kiln Site in the Omi area was mainly supplied to the Shiga Tumulus Group in the Omi area and the Funakiyama Kofun Tumulus Group in the Mino area, and that produced at the Senri Kiln Site in the Kinai area was supplied in smaller numbers. In light of the other burial goods, it was found that the supply of Senri-style Sue ware was restricted to the upper hierarchical levels of the tumuli. In contrast, Kagamiyama-style Sue ware were supplied even to relatively low-ranked kofun tumuli. As a result, we considered that only local potentates had access to products from areas close to the royal center.